

現職教諭帰国報告会 発表内容 - 国際教育協力シンポジウム -

松田 真里

(16-1, フィジー, 青少年活動, 宮崎県立富島高等学校)

1 配属先と要請要請内容

(1) フィジー盲学校 (Fiji School for the Blind) カトリック系 N G O であるフィジー視覚障害者協会付属の学校で、フィジー唯一の視覚障害児専門教育施設。初等教育 8 年、中等教育 5 年、職業訓練コース、重複障害クラスあり。地方および他国生徒のための寄宿施設を備えている。フィジーは、南洋州の中ではさまざまな分野で中心となる国であり、教育水準も他の国より高いため、ソロモンやサモアからの生徒も受け入れている。

(2) 要請内容は、「職業訓練コースの充実を図る目的」で「具体的にはコンピュータと木工を指導」するということであったが、配属先の状況は受入希望調査表が記入された当時とは随分変わっていた。具体的な活動内容として要求されていた「木工指導」については時間割の中にも組み込まれておらず、これから指導していきたいという要望もなかった。また、職業訓練コースも 2005 年から一時閉鎖となった。

2 フィジーの教育制度と J O C V としての役割

フィジーの教育制度は、8 - 4 - 1 制をとっており、初等教育が 8 年間、中等教育が 4 年間、大学進学希望者はもう 1 年、フォーム 7 で勉強する。本校での J O C V の役割は次の通りである。

(1) クラス 4 ~ クラス 8 の生徒にコンピュータの基礎を指導

(2) 職業訓練コースの生徒 (中等教育に進まなかった生徒) に、コンピュータの指導を含む、自立を図るための訓練。

3 活動計画

現職教諭は、他の隊員よりも活動期間が短いため、その限られた時間を有効に使い充実させなければならない。そこで、2004 年の 3 学期を目標設定のためのリサーチ期間、2005 年を本格的活動期間、2006 年の 1 学期を引き継ぎを含むまとめの期間と定めた。リサーチ期間は、配属先の様子を伺うというのではなく、初めから自分にできることを次から次への挑戦し、その中から取捨選択していくという方法をとった。

4 目標とテーマ

- (1) 活動目標に関しては、まずは教師として最優先すべき「授業の充実」を第一に掲げ、「対生徒」から「対教師」へ、そして最終的には「受入国」へアプローチができれば良いと考えた。
- (2) 1年8ヶ月の間、前向きな気持ちを持続させるために、自分自身の活動のテーマを定めた。そのテーマは「つなぐ」である。さまざまな活動が、未来へつながるように、子供たちの心に残るように、といった願いである。また、前任者が2000年に起きたクーデターが原因で、定着させることのできなかつた活動を引き継ぎたいという意味もあった。

5 具体的取り組み

- (1) 2004年9月～12月
クラス4～8・職業訓練クラスのコンピュータ指導
職業訓練クラスにて、調理・体育・アート&クラフト・園芸などの指導
- (2) 2005年1月～2006年3月
クラス4～8・職業訓練クラスのコンピュータ指導
教材・テスト問題の点字変換・テキタイル作業
- (3) 昼休み・放課後の活動・・・盲人用卓球・盲人用オセロ・リコーダの指導
- (4) 交流活動・・・長期休みを利用しての、家庭訪問

6 取り組みと成果

上記取り組みについて、写真を使って説明。詳細については、隊員報告書に記載。

7 JICAへの提案

最終報告会の席で、今後の援助の見通しについてJICAへ次の内容を提案した。本来に必要な援助の見極めは、末端で活躍できるJOCVの重要な役割であるとする。

- (1) 人的協力・・・障害者雇用のサポートとしての隊員および特別クラスのサポートとしての隊員要請。
- (2) 資金協力・・・国内・外の生徒への奨学資金制度。
- (3) 物的協力・・・点字プリンタ(バージョン3)

8 フィジー教育省への提言

活動の締めくくりとして、配属先省庁である「フィジー教育省」に次の内容を提言した。

- (1) スタッフ不足の改善
- (2) 障害を持つスタッフへの人材補給
- (3) 教育省独自の点訳担当者の設置
- (4) 点字教科書の作成

9 自己評価

- (1) 技術移転の観点から・・・評価 20点 (評価指数 50%)

職業訓練クラスが2005年度の初めに一時閉鎖になったこと、またコンピュータの指導ができるスタッフが既にいたことから、これといって新しい技術の移転ができたとはいえない。

- (2) 役務提供型援助としての観点から・・・評価 90点 (評価指数 30%)
2005年度から、教材の点字変換やテキタイリングの仕事をするようになったが、この仕事量は半端な量ではなかった。人件費削減のため現地スタッフが解雇された為に、私が担当することになったのであるが、点字変換用のソフトおよびプリンタの使用方法を新しいスタッフに指導したり、実際に作業に携わり、役務提供としてかなり貢献できたと思う。
- (3) 国際交流の観点から・・・評価 80点 (評価指数 20%)
- (4) 現職教諭参加制度の目的の観点から・・・帰国後に期待
- (5) 総合評価・・・53点

$20 \text{ 点} \times 50\% + 90 \text{ 点} \times 30\% + 80 \text{ 点} \times 20\% = 53 \text{ 点}$ (技術移転) (役務提供) (国際交流)

任地で活躍できなかった、47点分を帰国後に教育現場で補いたい。

10 帰国後の活動 - 教育現場に還元 -

(1) 帰国報告会の実施

全校生徒を対象に、1学期末テスト終了後に「青年海外協力隊帰国報告」と題して、講演会を行った。内容は、「なぜ途上国に対する援助が必要か」「JICAとは何か」「青年海外協力隊とは何か」「現職教諭参加制度の目的」「募集～派遣国の決定～派遣前訓練について」「フィジー国の概要」「異文化で生活することについて」「フィジー盲学校活動内容について」等である。

テーマをしばり、各学科(クラス)に出前授業を実施した。また、これからも実施予定である。2学期末テスト終了後の比較的ゆとりのある時期や、2年生の修学旅行中にできた空き時間を利用した。テーマと対象クラスは次のとおりである。

- ・フィジーの文化 被服編 (生活情報科 対象) 授業：家庭総合・家庭情報・被服
- ・フィジーの文化 食物編 (生活情報科 対象) 授業：食物
- ・フィジー盲学校での経験 (情報処理科 対象) 授業：情報処理
- ・フィジーの言葉と文化 (3年 対象) 授業：オーラルコミュニケーション1
- ・Human Rights in Fiji (国際経済科 1年 対象) 授業：英語実務
- ・フィジーの産業 (国際経済科 3年 対象) 授業：国際ビジネス

(2) 教科指導の中で・・・英語実務担当

商業科目の一つである「英語実務」は、商業の教員にとっては負担が大きく、なかなか担当を希望するものがない。帰国後、この科目に初めて挑戦してみることにし

た。初任に戻った気持ちで、英語科教員の指導を仰ぎ、日々試行錯誤しながら、何とか授業を成立させることができています。

(3) ボランティアへ活動の積極的参加

協力隊での経験を、学校現場だけではなく社会にも還元する必要があると考えている。特に、私は日本での盲学校の勤務経験がなかったため、逆にフィジー盲学校で学ぶことも多かった。その経験を何らかの形で社会に還元できないだろうかと考えていたところ、フィジー盲学校の元同僚から、日本点字図書館主催の「途上国の視覚障害者を対象とするICT講習会」が7月から8月にかけて実施されるという情報を得た。さっそく、主催者側とコンタクトを取り、参加させていただくことにした。講習会は、マレーシアと日本で行われ、マレーシアで2日間、日本で4日間の計6日間のという短い時間であったが、有意義な時間を過ごすことができたし、逆に学ぶことが多かった。マレーシアでは、友人の英語教師も巻き込み、ガイドとして活躍してもらった。

(4) 特殊教育に対する意識の向上

フィジー盲学校での経験を通して、特別支援を必要とする人々に対する、ICT教育の重要性を強く感じるようになった。帰国後、すぐに放送大学で特殊教育について学ぶことを決意し、入学した。現在特殊教育に関する3科目8単位を履修中である。

(5) クラス経営

4月から、1年生のクラスを受け持っている。派遣前と比べて、自分の内面的な変化がクラス経営に大きく影響している。自分の気持ちを、素直にストレートに生徒にぶつけることができるようになったことが、クラスを経営していく上で良い方向へと向かっていると思う。また、学級通信はフィジー語のスラング「SETTIKO」とタイトルで、「OK」という意味がある。1年が終わるときに、全員が「SETTIKO」であるといい、という願いが込められている。

11 感想

(1) 配属先は、あらゆる人間関係の対立があり決して活動しやすい環境であったとは言えない。スタッフのチームワークは最悪であり、日々トラブルの連続であった。しかし、その中で自分が本当に信用できるスタッフをみつけ、配属先での問題点や悩みを分かち合い、仕事を進めていくことで自分自信が成長できたと思う。そして、苦労した分、得るものも大きかった。

(2) ガイドブックにある「癒しの楽園フィジー」はバカンスで滞在する人々が感じるのもので、わたしたち協力隊員の日常には縁遠いものであった。表の顔が観光楽園であるとすれば、その裏側には根深い民族の問題を根底に、土地問題・環境問題・政治経済・産業面とさまざまな問題を抱え混沌としている顔がある。このような国で暮らし、異文化を体験する中で、常に「現職教諭参加制度」による派遣であることを意識して生活した。できるだけ、この国に対する興味を持続させ、あらゆるものを吸収しようと務めた。その結果、日本の生徒に伝えたいことが、日常の中で蓄積され、貴

重なる財産となった。

- (3) 協力隊参加経験を、帰国後に学校現場で活かすことが「現職教諭参加制度」の大きな目的である。海外での、しかも途上国での生活経験は、想像していた以上に考えさせられることが多く、日々発見の連続だった。今回の経験で得たすべての事が、今後の教育現場で活かされると確信している。

